

新任教員紹介

健康科学科 竹中 香名子

反対を押し切って看護短大に入学したとき、母に「あなたは遠くへ行ってしまう娘だ」と言われたのは、今、考えると「当たっていた」と言わざるをえません。

私の10代半ばから20代は膝や足の手術の連続でした。看護短大に入学してから、立ち仕事の看護師は難しいと現実を突きつけられ、短大卒業後に保健師専攻科へ進学しました。専攻科で「ついで」に取得した養護教諭の資格で大阪府教員採用試験に合格してしまい、以降12年間、養護教諭として小・中学校3校で勤務しました。

養護教諭として働くのは、天職だと思うほど充実していたのですが、一方で、困りごとや疾患をもつ子どもたちと接する中で、その子どもを他の先生方にどのように説明すればいいのか、学校ができる支援を保護者や関係職種・機関に納得してもらうにはどうすればいいのか、とても悩み葛藤しました。この時、一番葛藤したのが「出生体重が840gだった児が就学する」と聞いた時です。「超低出生体重児だ。小学校の集団生活では、きっと困りごとがおこるはず」と考えたのは私だけで、管理職を含め先生方はみんな「小さく生まれても普通の小学校に入学するんだから、大丈夫、大丈夫」という考えでした。私は先生方に、超低出生体重児にどんな困りごとがおこるのかを根拠をもって説明することができず、入学前に具体的な準備が何もできませんでした。その児童が入学後に「大丈夫」だったかどうかは、記さなくてもわかっていたことと存じます。

その後、私は養護教諭を辞職して大学院へ入学し「学齢期の極低出生体重児をもつ母親の児の発育発達に関する認識」という修士論文を書くことになりました。修士課程卒業後は博士課程に進みつつ、医療系の大学で保健師と養護教諭の養成に携わることになりました。縁あって、今は本学で養護教諭の養成に粉骨砕身しています。

研究活動としては、大学院時代から一貫して、極低出生体重児を含め、近年増加している医療的ケアが必要な児や慢性疾患をもつ子どもたちの学習活動を保障し、学校生活に適應するために必要な支援や体制づくりをテーマに研究を続けています。最新の論文は、慢性疾患をもつ児童生徒らの学校生活を支援するために使用する「学校生活管理指導表」の小学校での活用実態を調査した研究です。学校生活管理指導表を使用する疾患は、心疾患、腎疾患、糖尿病、アレルギー疾患と決まっていますが、調査の結果、養護教諭はこれ以外にも神経疾患、血液疾患、内分泌疾患などの疾患管理を行っていることが明らかになりました。また、養護教諭は疾患管理に、症状や急変時の対応についての情報が必要であると回答した割合が高かったのですが、疾患名と学校生活上の制限・留意点以外の情報は、学校生活指導表から得られると回答した割合が低く、担任や保護者から情報を得ていました。担任や保護者に疾患管理に必要な情報を確認することで連携の機会になっていると考えられますが、学校生活指導表の内容の見直しが必要であることが明らかになりました。

幸い、一連のテーマで今年度、科研費を獲得できましたので、さらに研究を重ねていきたいと考えております。

もう一つ、私には細々と続けている研究テーマがあります。それは養護教諭時代に子どもたちが「ぶっ殺すぞ」「刺してやる」と笑いながら言っているのを聞いて、悲しい気持ちになったことから始めた「生と死の教育」に関する研究で、養護教諭の頃はこのテーマで研究していました。最近、医療職や医療職を目指す学生の死生観を明確にすることで、相互の専門性の理解や協働に活用できないか検討しています。本学部の学生は、スポーツや健康に興味のある学生、性教育を行う可能性のある学生、病院や福祉施設に就職する学生がいるため、どのような死生観なのか興味があります。近いうちに、本学部でも調査を行いたいと考えていますので、その際はご協力いただきますようお願いいたします。

こうして、自身の養護教諭時代や研究活動、大学での教育活動を振り返ってみますと、やはり母が言った通り「遠いところに行った娘になった」と思います。自分が大学の教員になるなど予想していなかったですし、論文を書いたり、国から研究資金をいただくことができるとは思っていませんでしたので、今の自分は、身の丈を大きく超えた、自分が生きていくと考えていたところより「遠いところ」にいると感じています。

分不相応な身で教育や研究活動ができておりますのも、いつもご指導・ご助言いただいております先生方やご協力いただいている事務のみなさまのおかげでございます。この場をお借りいたしまして、厚く御礼申し上げます。また、引き続きご指導・ご助言いただきますようよろしくお願い申し上げます。

なお、母は健在で、大阪に住んでおり「名古屋ぐらいならいい」と申しております。